高校生と創る演劇

ガンボ!

GUMBO

2017. 11★3 金・祝 4 土 5 日

★3日(金・祝)・4日(土)13:00／18:00 ★5日(日)13:00

報告書

PLAT
穂の国とよはし芸術劇場
TOYOHASHI ARTS THEATRE

中日新聞(夕刊)　2017年12月20日(水曜日)掲載

Newspaper Article

文化芸能

安住敦子の舞台プリズム

地元の高校生たちが出演した「ガンボ！」（青木豪作、稲葉賀恵演出）が魅力的だった。愛知県豊橋市の穂の国とよはし芸術劇場PLATの制作で、海外からの移住者の多い

穂の国とよはし芸術劇場PLAT「ガンボ！」

地域性にふさわしく、ブラジル移民の歴史なども織り交ぜた作品。多文化が混じり合うさまをはつらつと見せた。

優勝者にアメリカ旅行が当たる高校生の料理コンテストに、二つの高校の料理部が参加しようとする夏休みの物語。地元の食材を使いワールドワイドな料理をという条件で、それぞれの部員たちはブラジルからの移住者の子らにアイデアを求めるなど四苦八苦。そんな話を、恋や嫉妬、裏切り、両親の離婚など、現代の高校生の群像劇として描いていく。その中に、ブラジル出身の母親のルーツを知ろうとする少女が、第二次大戦中のブラジルの日本人社会にタイムスリップするエピソードを入れ、両者によって、さまざまな民族と文化が混じり合ってきた長い歴史と今を思わせる内容だ。

ベースに料理を置いたことで、その混じり合いを分かりやすく伝えた。異国に移った人々は、その土地の食材と背負ってきた文化、他者との交流の中で新しい料理を作る。今の日本の多彩な食文化もそうした中で生まれてきたし、また新たに生まれつつある。また、そうした融合を妨げるものも必ず現れる。今も昔も偏狭さとそのねじれによるテマだ。それらを歴史と今を重ねて重層的に描き、混じり合ってきた社会と文化が現に目の前にあると示すのだ。

フライパンや鍋をリズミカルにたたき、歌うところから舞台は始まり、大小の箱を移動して各場面の装置を作るなど、舞台は終始にぎやか。それでいて大人役も含めてそれぞれの役を個性的に演じた。高校生だけの出演とは思えない充実した舞台だった。（十一月三一五日、PLAT）

はつらつと演じる高校生が印象的な「ガンボ！」

多文化の混交 はつらつと

※地載の記事・写真は新聞社の許諾を得て掲載しています。

◆編集後記

劇場は今年で5年目、「高校生と創る演劇」シリーズは今年で4年目となりました。最初から関わった身としては、このシリーズを卒業した高校生が大学進学や就職など社会に出ていくのを見届けるのがとてもうれしい。お盆休みで帰豊したときにプラットに寄って近況を教えてくれるなんていうのも、とてもうれしい。彼らは学問に励んだり、仕事を頑張ったり、サークルを楽しんだり、たまにはバイトの愚痴を言ったり、結婚したいとかいう子もいれば、演劇活動に勤しんだりと…。いろんな道を歩んでいて、いずれも楽しそうに話すので私も楽しく聞きます。演劇は、人が関わり合って創る芸術です。劇場で人と出会うこと、芸術と出会うことを高校生時代にできた彼らの未来は明るい。ここでしか創れない表現に出会えたことに感謝しています。これから社会に出ていく彼らと、これから作品を創っていく彼らに期待をこめて。

穂の国とよはし芸術劇場PLAT
事業制作部　永田

STAFF

作――青木豪
演出――稲葉賀恵
ステージング――下司尚実
演出助手――萩原亮介
美術――杉山至
照明――佐々木真喜子
音響――星野大輔
衣装――富永美夏
音楽協力――棚川寛子
舞台監督――土居歩
宣伝美術――共田慎性☆
中川裕樹☆
☆㈱エクスラージ
宣伝写真――萩原ヤスオ
記録写真――伊藤華織
記録映像――田中博之
制作――矢作勝義※
永田直子※
石田晶子※
※穂の国とよはし芸術劇場PLAT
制作助手――佐和ぐりこ
協力――㈱キューブ
文学座
㈱泥棒対策ライト
㈱ファクター
㈲サウンドウィーズ
オレンヂスタ
かしわ焼肉みかわ家
主催――公益財団法人豊橋文化振興財団
共催――豊橋市
企画制作――穂の国とよはし芸術劇場PLAT

文化庁
平成29年度文化庁
劇場・音楽堂等活性化事業

「高校生を通じて自分のこれからを見つめ直す、贅沢な時間」

演出　**稲葉賀恵**

オーディションを含めて約半年の共同創作の中で、最初に彼らに感じた印象は、極めて良い子たちであるということでした。課題に対して真摯に向き合い、それに合った発想や答えを提案する。こちら側の特性を瞬時に観察し、それに準じた反応をする。お行儀がいいと言いますが、私は高校生の時分、果たしてこんな反応が出来ただろうかと感心したものでした。しかしその代わり、枠からはみ出たり、輪を乱すような子は一人もいなかった。今から思えば、当時の彼らの反応は自らの意志を発信していたのではなく、あくまで私たちに見合った受け身としての反応だったのかもしれません。彼らの身体を、どう「発信」の身体に変えていくか、これが稽古初盤での一番の課題でした。演劇活動において最も大事なことの一つに「相手に対してオープンになる」ことがあります。これは演劇活動に限らず日常生活の上でも大事な要素の一つです。その為には相手の反応に臆することなく自分から「私はこう思う」と言ってみる、まずはそこから相手とのコミュニケーションが始まるし、なにより私は彼らの自発的な表現を求めていました。

どう彼らに「私はこう思う」表現を発信してもらうか、彼らの身体の中にある意志や欲求を、自らの表現で発信してもらうにはどうしたらいいのか。その為にはまず私たち自身が、積極的に高校生一人一人に対してオープンになることが大事だと考えました。私たちが一方的に持っている高校生という固定概念を取り外し、一人一人の発信の扉を探す。当たり前のことですが、これがなかなか難しかった。一人一人のカルテを作り、日々健康診断を行うような心地とでも言いましょうか、そしてそこには私という演出者のメンタルも深く関係してきます。高校生に限らず、言わずもがな私たちはそれぞれ、発信の扉の場所が違います。どこをノックすれば表現の扉が開くのか。彼ら全員のノックの仕方を探るのにはとても多くの時間を要しました。彼らは他人からの言葉に必要以上に傷付きやすく、影響の受け方が半端ない。そこには個人差はあれどそれぞれの自己承認欲求の強さやコンプレックスがあります。

だからこそ一人一人に投げかける言葉を探し、投げては待つ必要があったのです。そして次に私が伝えようとしたのは「私たちは正解を持っていない」ということでした。私は作家ではないので、台本の言葉を生み出すことはありません。だから、台本のことで彼らが答えを求めたり、こちらを伺うような反応を見せた時、私はしきりに、「答えはない。私達の納得できる選択をその都度探していけば良いのだ」ということをキャストは勿論、スタッフにも告げるようにしました。

実際、正解答がもらえたら簡単に解決できることもあると思います。しかし、日常生活でも簡単に正解答が見つかることはまずありません。誰かの正解を探すのではなく、自分たちで選択をしてほしかったのです。

これには彼らも戸惑いを見せていたように思います。しかし徐々に自らの選択を楽しむようになり、それが皆に波及するのは早かったように思います。

しかし稽古中盤から終盤にかけて、もう二つの大きな課題が出てきました。それは「相手を尊敬し、受け入れる」ということです。

初日が近づくにつれて、彼らは個人の表現に走るようになりました。自分がどう見えるかに集中するあまり相手が介在しなくなり、途端作品としての強度が無くなっていったのです。相手の為に台詞があり、相手の芝居が自分を創っているのだということを分かってもらうには、彼らだけでもう一度お互いを知るための機会を設ける必要がありました。どう作品を創っていくのか、積極的に高校生だけでの話し合いを促すことで我々はチームであり、最後は自分たちの手に委ねられているのだということを自覚してもらわなければならなかったのです。

結果彼らは自発的に話し合いを設け、音楽やムーブメントなど団体創作の自主練習を積極的に行う様になりました。思い返してみてもあの時間はとても貴重だったように思います。

正直な所、高校生に書き下ろしの台本で挑むことは簡単なことではありませんでした。加えて音楽やムーブメントなどの様々な要素を短い稽古期間でものにしていくのは大人でも難しいことです。

ただ私が今回大事にしたことは、演出家として悩みながら一つ一つを選択する姿を積極的に見せることだったように思います。振り返って見ると、演劇という枠を外してしまえば、稽古場で起こる様々な問題はそのまま日常生活の中で起こる問題に直結します。その問題を前にして一緒に悩む時、彼らは初めて少しだけ発信の扉を開いてくれました。そして彼らに投げかける一つ一つの言葉が自分に返ってくる時、自分が彼らと何ら変わらない悩みを持っていて、同じ感覚を持つ同士なのだということに気付いたのです。その瞬間、この企画の「三十代の演出家と高校生が出会う」意義を再確認したように思いました。

公演が終わり彼らが初めて仲間の前で自分のパーソナルな部分を自信を持って打ち明けることが出来たり、自らの感情を素直に出している場面に遭遇した時、この企画の一端を担えたことにとても大きな意義を感じたことを覚えています。彼らの前にある、未来というとてつもなく深淵な時間のその一瞬に深く関わっているような気がしたのです。この創作経験が自分の演劇活動の意味を見つめる大きなきっかけになったことは間違いないのですが、その意味が分かるにはまだ時間が掛かる気がしていて、それが分かるまでもう少し創作活動を続けようと思っています。

「彼女たち彼たちの生きている言葉」

作　**青木　豪**

第一稿を書き上げ、まず高校生に読み合わせをして貰いました。その時、僕が面食らったのは、台詞中の「不毛」という言葉を、殆どが「知らなかった」ことでした。「『不毛』って死語？」と僕が聞くと、誰もが「すみません」と言うのです。「何の得もないってこと」と一応教えたてはみたものの、僕は戯曲にその言葉を残すのをやめました。今を生きる高校生が使ってもいない言葉を、大人のエゴで無理に使わせることこそ「不毛だ」と思ったからです。

「他にもさ、こんな言葉は今使わないと思ったら教えて？」

そうして僕は、今の子達が「連絡先を聞く時」は「Ｌｉｎｅ教えて」と言うことや、放課後コミュニケーションをとる場所が「コンビニのイートイン」や「カラオケ」だったり、「オクラ」は「納豆と一緒に食べる」より「マヨネーズで和える」のが主流、などという情報を教えて貰いました。

若い人達と話していると、大人の言葉が「理解されていないのではないか」と不安になることがよくあります。「青春って不毛だよね。」と言ったところで「不毛」の意味を知らければ、何を言いたかったかは伝わらず仕舞い。そうして何より恐ろしいことは、若い子らは、そんな時きっと大人に気を使い「そうですね」と頷くことです。大人側が「わかってくれた」と思った時、そこには大きな断層が生まれているのです。

しかし演劇は有難いもので、何度も稽古をしていると、意味を知らずに音にした言葉は、ハッキリそれとわかります。「意味は？」と聞くと大抵「すみません。」と返ってきます。「謝らなくていい。僕らの言葉を教える。かわりに君らの言葉を教えて。」

そうやって一つ一つ言葉の意味を検証し「ガンボ！」の戯曲は完成していきました。精魂込めれば言葉は届く、というのは奢りか思い込みだと僕は思います。対話が成り立って初めて言葉は本当の意味を持つ。演劇と高校生達がそれに気づかせてくれた。この仕事の、最大の報酬はそれでありました。

〝いい思い出〟で終わらない日々になるように

ステージング　**下司尚実**

豊橋にくる前は〝高校生と創る〟という言葉に少しドキドキしていました。舞台というのはその瞬間にしか存在しないものですから、やる側にとってい思い出になりやすい媒体だと思います。せっかく舞台で生きて行くんだという変な大人たちと出会ったのだから、「楽しかったね」だけで終わらず、これからどこでどうやって生きていくかはわからないけれど、自分や他人と事柄とに向き合い続ける気持ちを得るきっかけになれたらと考えていました。つまり高校生と創る日々は一人一人の人生に向き合うという感覚が常にありました。誰かが成長しようという気持ちをやめてしまったら、それは伝染しつまらない作品になってしまうでしょう。そうならないように稽古場を盛り上げていくことが大きな仕事だったように思います。終演後、全力で泣いて笑って過ぎ去った日の貴重さを噛みしめる高校生たちを見ていたら、何かしらの種を蒔くことはできたのかなと感じました。

肯定し合うということを信じて

演出助手　**萩原亮介**

創作の過程で日々行っていたのは、高校生達からのあらゆる形での発信に対し、一つ一つ『いいね』をする事だったように思います。夏のワークショップまでの過程で感じたのは、『正解か否か』に対する過敏さでした。

学業が本分である高校生活の中では、正解を求める時間が圧倒的に多いと思います。またＳＮＳ普及の中で複雑多感な時期を過ごす彼らは、自分の価値観にさえ数値化された結果を求める傾向と、僕たち以上に隣り合わせなのかも知れません。

演出上求められたのは、まず自らの解釈で発信し、他者の返信による変化を楽しむ身体。肯定し合う身体でした。

正解のない創作は、毎秒葛藤を伴ったと思います。だからこそ日々のトライへ、自由な解釈へ、それが根ざす個性への肯定を、こちらからもきちんと表す事が、技術的なアプローチ以上に重要に感じられ、また自分も改めて気づく大きな機会となりました。

明確な指針など無い社会へこれから出て行く彼らにとっても、何かこの経験から生かされるものがあればと思います。

高校生と創る演劇

ガンボ GUMBO

出演者紹介

❶他己紹介 ❷自分を料理に 例えると? ❸最近フク ザツな気持ちになったこと

◎柳生橋 海子
内柴 楓

❶ふうさんは、稽古中にみんなの気が緩んだ時にピシッと引き締めてくれるリーダー的存在で、日を追うことにアコさんが身体に入りこんできています。(桃井咲良)❷濃厚デミグラスソースがかかってるチーズインハンバーグ!❸稽古期間にテストと稽古が重なって、稽古とテスト勉強をしないといけないのがフクザツです(笑)

◎芦原エラ
中村愛利彩

❶えまはとってもノリがよくて面白くて優しい先輩です!きちんと自分の役と向き合って、真剣に演劇のことを考える姿はとってもかっこいいです!(朝倉捷)❷適当な味付けのされたスパゲッティ❸少し前までめちゃくちゃ暇だったのに、いきなりやる事が重なって出てきたこと。

◎向ヶ丘早希
萩原暁恵

❶あきえは常にノリノリでボケボケな感じです。あとは、笑いのツボがどこか違ってますね。でも、それを全てひっくり返すほど真面目で、勤勉です。(山本龍成)❷ピリッと山椒香る回鍋肉・大盛ライス付き❸姉と喧嘩して初めて1週間以上口を利かなかったのに、ある日自然と会話が始まったので、今までのは何だったんだろうとフクザツな気持ちになりました。

◎東田陽平
山本龍成

❶にとろはシャイボーイ!Lineの文面とかすっごいシャイボーイ感ある!けど、盛り上がるとめっちゃ踊ったりテンション高いです(笑)(小松夏恋)❷チョコ味のものですかね。チョコの様に単味で甘いっていう感じで。❸劇中、好きな人やらを問い詰められるシーンの稽古です。公開処刑以外の何物でもないですよあれ(苦笑)

◎小池知佳
山田紗穂

❶せーらさんはとてもフレンドリーさんで、みんなの妹のような感じですね。でもしっかりしているし、意見もたくさんくれて頼もしい存在です!(村上真由)❷うなぎパイのパフェ❸高校生なのに、「小学生ですか?」と言われたことです。本番では高校生を演じられるよう頑張ります(笑)

◎植田のあ
鎌倉慶香

❶笑顔で明るい女の子。水筒忘れちゃったり…ちょっとおっちょこちょいなところが可愛いです。トーク力に優れていつも楽しませて貰っています。(山本安那)❷だし巻き玉子❸友達が言いにくかったことを、代弁して伝えてあげたときに、「ほんと男気ある〜♥」と言われたこと。

◎杉山智花
小松夏恋

❶切替の早いしっかり者で、常に全力で稽古を楽しみ、稽古後も納得のいくまで何度も練習する頑張り屋さん。眩しいほど明るい笑顔にも注目です!(朝倉幹也)❷おはぎです!(笑)他の子に聞いたらおはぎって言われた!(笑)❸見知らぬおばさんに将来の夢をきかれ、手相を見て頂いたこと!話の内容が内容で、夢か現実か未だに不思議…

◎神戸里香
布川凛花

❶りんりんはちっちゃくて、笑顔がすごくかわいいです!普段はみんなとワイワイしてるけど、稽古になると真剣に見てますごくカッコいいです。(内柴楓)❷オートキュイジーヌ。フランスの伝統的な高級料理。複雑な味付けと手の込んだ飾りが特徴。❸最近あったフクザツなことと、フクザツなことがないこと。毎日脳みそは舞台のことだけ。

◎大清水晴翔
稲吉康平

❶こーへいは話しやすい人です。自分が難しいと思ったシーンをテレビや映画を観て勉強していて、演技に関してとても熱心なところ、尊敬しています。(中村愛利彩)❷麺類が好きなのでミートスパゲティ!❸ガンボの初日が高校の文化祭。最後の文化祭に出たかった気持ちと、ガンボをやりたい気持ちでフクザツです。

◎A君
朝倉 捷

❶つなを一言で言うなら皆のいじられキャラです。とても接しやすくて男女問わずいい意味でいじられています。巻き込まれ型イケメン優男でノリがいい!!(青山拓未)❷ツナじゃが❸豊橋駅周辺をポケットの中身をずっと外に出しながら歩いていたこと。

◎豊島レナ
市原麻帆

❶麻帆ちゃんは基本的にマイペースな方です!ダンスなど体を動かすことが好きで、演技も凄いです!真帆ちゃんにしか出来ない演技に注目です!(杉山華)❷ピリッとしたり、甘かったり、マイペースな味噌味のラーメン。❸しいて言えば、「ガンボ!」の台本の私の役の箇所に、小さい。と書いてあること。しかも追加で増えたしっ。

◎豊島大和
青山拓未

❶一見静かで大人しい印象ですが、役に対しては一生懸命で、純粋に演劇にぶつかる、秘めたパッションをもつ色白ボーイです!(布川凛花)❷漬け物(地味だけど存在感&刺激がある)❸自分の行動でたまに自分でも何やってるんだろうと思ってしまうことが何とも言えない感じかな〜。

◎前畑葵
桃井咲良

❶雰囲気が柔らかくて接しやすい子です。根が真面目で稽古にも人一倍真剣に取り組み、一人何役もやっていて皆を引っ張ってくれる存在です。とても尊敬しています!(山田紗穂)❷茶碗蒸しっぽいってよく言われます。❸稽古中に動きや芝居で直しが入ったのに、思うようにできないときにフクザツで悔しい気持ちになりました。

◎新川初子
日野原和恵

❶ユーモアがあり、りんりん(布川凛花)と2人で皆をよく笑わせてくれています。少しはっちゃけたずえですが、役に入ると一変し、よく考えられたお芝居をしていて驚かされます。(稲吉康平)❷ガンボスープ。ほんとにシンプルにそういうこと、生前から今日までずっと。❸ここでは言えないくらいフクザツな事がありました(笑)お父さんが〇〇〇進行中で、すでに〇が〇〇〇こと。

◎前畑一郎
金子治親

❶はるちーは努力家です。冒険のノートという自己分析ノートはもうすぐ50冊目に突入。独特な雰囲気で、親しくなるとはるちーワールド全開!きっと貴方も彼の虜!(萩原暁恵)❷イカの塩辛です。一つじゃ食べづらく、癖があるからです。❸夏休みのとき、ずっと家に居たせいか、今まで普通にできていた人との会話がうまく出来なくなってしまったこと。

ガンボ!それはフクザツな生まれの料理の名前

あるいはフクザツな生まれの あたしらの歌

【稽古】第1週目

◆9月25日(月)―10月1日(日)

9月上旬の自主稽古の出席率も高く、稽古直前に演出・稲葉賀恵による台本読みの稽古をして配役が決まり、意気込み十分に稽古が始まった。最初は読み中心の稽古で戯曲の理解を深める作業を丁寧に進めていった。作・青木豪も稽古に顔を出し、よりキャストの身体に合う言葉選びをして戯曲を推敲していった。キャストは、自分の役の附帳とシーンの時代背景などの調べものをし、発表。スタッフは部署分けをし、各シーンで使用する小道具、衣裳、稽古備品、楽器として使う調理器具などと各々のセクションで必要とされるもののリストアップとプランニングの課題を行った。

【稽古】第2週目

◆10月2日(月)―10月8日(日)

読み稽古を終え、立ち稽古を開始した。高校生スタッフ1名が、代役をするなかで、稲葉のオファーによりキャストを務めることになった。ボディパーカッションと劇中歌「IKO IKO」の練習などステージング・下司尚実による身体作りの時間を取っていった。高校生スタッフは、小道具、衣裳関係、楽器などの募集を始めた。また、舞台美術・杉山至とともに、小道具の箱の塗り、汚し作業を行った。それぞれ柄が違い、十人十色の木箱が完成。稽古外では、高校生だけで集まり、自主的にガンボ作りをするなど楽しみながら作品理解を探求した。

【稽古】第3週目

◆10月9日(月・祝)―10月15日(日)

小道具の箱を使用した稽古が始まる。場面転換で箱の配置を変えるステージングの稽古が進められた。異なる学校・学年の高校生達は、稽古に参加できる時間が違い、さらに模試や学校行事などが重なり、試したいシーンや演技の稽古がなかなか進まず苦戦した。音楽協力・棚川寛子が、調理器具を楽器として使用した楽曲を高校生達と創作した。今まで練習していた歌に音楽が入り、同じ歌でもシーンによってニュアンスが変えられていった。

場面転換のステージング、歌に演奏、と演技以外の稽古の時間を多く取る週だった。週末には初の止め通しをし、戯曲も何度か改定されたのち、このとき最終稿が完成した。

【稽古】第4週目

◆10月16日(月)―10月22日(日)

高校生スタッフの製作・収集した仮小道具を使い稽古が行われた。別室も使い演技とステージングの稽古を並行して進めた。セリフの掛け合いでは、相手の言葉を受けて、どう反応するのかが、演技にうまくつながらず、何度も試して話し合い、じっくりと創り上げていった。22日には台風の天気予報の中、高校生が無事自宅に帰れるよう十分に交通の便を配慮し、時間を早めて稽古を行った。各セクションのプロスタッフが一同に来ての通し稽古をし、今後の方向性を共有した。高校生スタッフは、衣裳パレードでは着付け、セッティングなどを衣裳係が、道具搬入・バンチ汚しでは小道具係が担い、大変頼もしい働きだった。

【稽古】第5週目

◆10月23日(月)―10月29日(日)

舞台美術を仕込み、今までの稽古場から、アートスペースへ移っての稽古が始まった。各シーンの演出をブラッシュアップし、週末に公開通し稽古を行う。同級生や部活仲間、家族などのお客さんに観られる緊張感を体験。高校生スタッフは、ステージの床面を塗料で土の地面ように汚す作業や、舞台の背景となる青色の黒板に芝居に関連するイラストを描いて舞台上を彩った。衣裳・小道具係は早替えに対応できる服作りや、小道具の養生など稽古での修正に対応。稽古時間をできる限り増やし、抜き稽古、通しの回数を重ね、劇場になれる為の時間をとった。また、この期間に体調不良でキャスト1名が数日欠席したが無事復帰できた。そのキャストも代役候補となった高校生スタッフ、またチーム全体も自分の役割に責任をもって取り組んだ。

【稽古】第6週目

◆10月30日(月)―11月2日(木)

テクニカルスタッフが小屋入りし、照明・音響など本番に近い状態の稽古になった。三方囲みの客席を意識した稽古にキャストも、自分がどう見られているのか、セリフを投げかける相手と関係し合うのかがイメージできるようになり演技が客席に届くようになってきた。高校生スタッフは本番当日にお客さんに楽しんでもらうためのホワイエ展示、衣裳の洗濯・管理・修正・舞台裏の着替え補佐、小道具の修正・舞台裏の補佐などと各セクションが本番を想定した仕事をしていった。最後の最後まで、試行錯誤し丁寧に作品を創り上げていった。

Schedule 2017

2月12日[日]	募集告知開始
4月14日[金]	オーディション申込締切
18日[火]	青木豪／脚本のための豊橋リサーチ ◆豊橋市内のハーフの高校生4名にインタビュー。
5月20日[土]21日[日] 28日[日]	**一次キャストオーディション** **二次キャストオーディション** キャスト確定
6月~7月	キャストへ脚本内容に関するリサーチ・インタビュー
8月14日[月]~17日[木]	**プレワークショップ**
8月14日[月]・15日[火]	テクニカル打合せ@PLAT
9月2日[土]	会員先行チケット発売
3日[日]	自主稽古開始／スタッフ打合せ@東京
5日[火]	青木豪脚本・演出作品 映像上映会
6日[水]	稲葉賀恵演出作品 映像上映会
9日[土]	脚本第1稿完成
13日[水]	高校生スタッフ向け制作レクチャー
16日[土]	一般チケット発売
17日[日]・24日[日]	スタッフ打合せ@東京
22日[金]・23日[土]	台本読み・配役決定
【稽古】	
9月25日[月]~10月1日[日]	1週目
10月2日[月]~8日[日]	2週目
9日[月・祝]~15日[日]	3週目
16日[月]~22日[日]	4週目
23日[月]~29日[日]	5週目
30日[月]~11月2日[木]	6週目
本番	
11月3日[金・祝]	◆13時・入場者101名／18時・入場者108名
11月4日[土]	◆13時・入場者128名／18時・入場者121名
11月5日[日]	◆13時・入場者196名
	◉総入場者数654名
2018年 3月12日[月]	**本番映像上映会**

高校生と創る演劇
ガンボ
GUMBO

高校生スタッフ紹介

●他己紹介

杉山華

●シャイですが、真面目で頑張り屋さん！スタッフ皆で作業する時、場の空気を明るくしてくれたり、受験生でお勉強にも気を抜かないところが素敵です。（岩瀬藍未）

岩瀬藍未

●女子高生の権化ってかんじがすごい。おめかししてて愛嬌があって、好きなものについてすごく熱く語る！あ、でも、仕事はきっちりこなす！（奥平紗也華）

山本安那

●様々なことに積極的で、割と明るめの元気ガールです。周りからはクレイジーガールと呼ばれていますが、実は冷静なところが凄いと思いました。（金子治親）

松井望寧

●もねはしっかり者で、周りをよく見てくれていて、頼れる存在です。もねの笑顔はとっても可愛くて、皆を幸せにしてくれます。（鎌倉慶香）

朝倉幹也

●ラナくんはいつも面白くて話してると楽しいです！一緒にスタッフやっててわからないことなどか色々教えてくれるし、話しやすいなぁって思います！（松井望寧）

奥平紗也華

●ガンボメンバートップクラスの不思議ちゃん！フレンドリー&おしゃれさん、そして絵も上手い！こんな多彩ガールのトレードマークはむらさきのつなぎ！（日野原和恵）

村上真由

●いつも優しい眼差しで稽古を見守ってくれてる！とっても真面目、かと思いきやオタク感が垣間見える…。素敵な人です!!（市原麻帆）

スタッフコメント

制作レクチャーにて

●部活の都合で途中参加になってしまったんですが、いろいろ制作についての仕事について知ることができ視野が広がりました。この制作レクチャーに参加する前は制作はどのような仕事をしているか分からなかったけど、このレクチャーで制作スタッフがたくさんの仕事をしてるということを知ることができました。実際に高校生スタッフたちで、どのようなことができるか等を話し合って発表しあう時間はとても楽しかったです。実際にこの話し合いの中から生まれたことをやったりして、とてもよかったし、普段しない仕事でもあったので経験になりました。

●舞台の世界のことを全く知らなかった私でしたが、皆さんが教えてくださり、とても濃い時間だと感じました。

稽古にて

●高校生スタッフとして多くの仕事をすることができて、とても楽しかったです。音響の仕事としてどんな音がこの劇にいれられるかを考え、自分の考えた音が実際に使われた時は、とてもうれしかったです。自分でどんな音があるかあれこれ考えることができたので、その作業をする時間も楽しかったです。また、稽古記録を取るのも凄くいい経験になりました。多くの情報を短い時間でまとめるのは大変でしたが、キャストの皆にありがとうと言ってもらえたことが、とても幸せでした。箱の色塗りも、スタッフの皆とあれこれ考えながら作業するのが楽しかったです。自分が色を塗った箱が舞台で使われているのを見て、色を塗ることができてよかったなと思います。床の汚し作業もとても楽しかったです。

●はじまったばかりの頃は、ツイッターと小道具しかやってなくて、稽古場で、ただ稽古をみていることもありました。でも日が経つにつれ、たくさんのことを一気にまかされたりするようになり、特に小道具を、ずっと養生をし続けていたときは自分がおかしくなりそうでしたが、とっても充実して、とっても楽しかったです。最後の方には、演出の稲葉さんから代役を頼まれたので、しっかりやらないと、という気持ちがとても強くなり、本当にがんばれました。

●主に衣裳をやらせていただきました。衣裳を通して、"この役にはこのカバンが合う"とか、役についてみんなで色々と考えた時が一番楽しかったです。つらかったこと大変だったこともありましたが、スタッフ総出で奮闘して、1つの舞台を作り上げていったことは、何よりの喜びです。

●はじめてやる仕事ばかりですごく心配していたし、高校生だから全然濃いことをしないだろうと思っていました。でも、私の期待以上に本格的なことをプロの方々と一緒にできたし、学ぶことも沢山あってすごくいい経験をさせてもらったなと思っています。特に、私は小道具として、稲葉さんや萩原さんと直接相談しながら作品をつくるにあたっての準備をするということをやらせてもらい、今やっていることに加え、さらに上の知識を教えてもらうことができ、本当に大きな経験となりました。

スタッフワーク

Staff Work

◎Twitter

稽古の様子を文章と写真で1日1ツイートしました。目標にしていたフォロアー数200人も無事達成しました。

◎ホワイエ展示

2Fの展示スペースまでの階段の装飾、お客様の感想ボード、高校生スタッフの仕事の紹介、小道具・舞台美術の説明、衣装案の冊子、インスタ映えするフォトジェニックな撮影スペースなど、お客様が楽しむことを考えて作りました。

◎パンフレット

当日にお客様に配るパンフレットのアイデア出しや、キャスト・スタッフから原稿の収集、などを行いました。

◎舞台美術・大道具・小道具

舞台美術・杉山至さんのもと、道具の木箱の色塗り、汚しや、舞台上のパンチカーペットをより土っぽくさせるための汚し、舞台背景となる大きな青い黒板に作品内容に関連するイラストを描きました。

◎稽古記録

今日行った大事なポイントを欠席者やキャストが復習できるように毎日記録を取りました。

◎代役

欠席したキャストの代役を務め、稽古を円滑に進める大事な役割を果たしました。

◎演出部

舞台監督・土居歩さんのもと、小道具の養生をしたり、舞台上のセッティング、バミリなどを行いました。公演当日には、小道具の置き場所の管理をしました。

◎衣裳

衣裳・富永美夏さんのもと、ブラジルシーンの衣裳づくりや、制服の校章の製作、コンビニ店員、A君の服などを作りました。衣裝パレードでのキャストへの着付けも行いました。

◎音響

シーンの時代や、状況を考えて、どんな音が必要かを考えました。

1 5月のオーディションワークショップについて

●オーディションの中で戯曲をやるのが、みんな同じセリフなのに、全員がやると全員違って、演じる以外で見ている時も楽しかったです。

●緊張と楽しさが忙しく入れかわり、あっという間だったなあと感じています。オーディションという短い時間の中でも演出の助言によって大きく演技が変わった参加者もいて、これからの作品をつくっていくことにワクワクした。

●知らない人ばかりで不安でいっぱいでした。去年参加した人も何人かいて、すでにみんな仲が良かったので正直もう遅れを取ったかと思って焦りました。でも演技や体を使って表現することによって、少しずつ分かり合えた気がして、楽しかったし、初めての表現方法で勉強になりました。

集計結果 1

オーディションワークショップ		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	7	6	1	0	0
スタッフ	日時	4	0	0	0	0

2 プレワークショップについて

●「試してみる」ということを多くやり、いろんなジャンルから「ガンボ!」を見ていった時間でした。作品の素材集めをしながらも、今まで気付かなかった自分の面も見つけられた時間でした。短い日にちの中で自分が日に日に変わっていっているのを実感しました。

●我々がなじみのない演劇の世界の、より深い所を、我々のなじみのある形で、紹介してくださった所がよかった。

●スタッフの高校生とも一緒に行動できていて、仲良くなれて良かったし、キャストの人たちともコミュニケーションをとれて良かった。知らなかったゲームも盛りだくさんだった。

●美術の杉山至さんの空間についてのワークショップは、普段空間について考えることなく過ごしていたので、内容が難しく感じましたが、自分が意識していないだけで、視野を広げると、様々な人の考えや意図などが見えてきて感動しました。

●オーディションで話せなかった人と仲良くなるいい機会でした。このワークショップがあったことで、作品について話すことができる仲になったと思います。

集計結果 2

プレワークショップ		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	8	4	2	0	0
スタッフ	日時	3	1	1	0	0
キャスト	回数	8	6	0	0	0
スタッフ	回数	2	2	1	0	0
キャスト	内容	11	3	0	0	0
スタッフ	内容	2	3	0	0	0

3 9月の自主練習について

●他の学校の人たちと仲良くなって、1つの作品をつくる為に絆を深めるいい時間だと思いました。

●自主練習で、みんなと課題のストレッチや、シアターゲームをしてすごくおもしろかったです。みんなでの自主練習は、夏のワークショップからぐっと距離も縮まって、本稽古がすごく楽しみでした。稽古の前に稲葉さんがいらっしゃって、早めに台本を読んだのも、すごく気合が入りました。

●下司さんに教えていただいた体操がとてもよかったです。私は体力がなかったので、この自主練のおかげで動きに幅ができました。

集計結果 3

自主練習		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	7	7	0	0	0
スタッフ	日時	1	2	1	1	0
キャスト	回数	8	5	1	0	0
スタッフ	回数	1	2	1	0	0
キャスト	内容	8	6	0	0	0
スタッフ	内容	2	2	1	0	0

4 稽古について

●本読みの期間が長かったので、作品のことをよく考えることができ、よかったです。

●稽古が終わっても、みんな残って、セリフとか動きの練習するのが嬉しかったです。1番はラジオ体操ですね。本当に学校みたいに楽しくて熱く打ち込んだ濃い日々でした。

●自分にとっては、初めての台本、初めてのセリフ、初めての演劇、初めての人達、全て初めて触れるもので、迷いこんでました。けど、みんなの演技を目が乾くほどガン見したり、自分でたくさん考えて、迷って、稲葉さんや萩原さんや、質問の言葉とか指導とかを噛み砕いて飲み込もうとしたり、毎日動いていくうちに、いつの間にか演劇を楽しめるようになりました。多分、キャストの誰よりも稽古でみんなの演技を見ていたのかなと思います。見るのがすっごい楽しかったです。

●自分の役の役割、シーンのメッセージ、作品のメッセージを常に詮索しながら、あーでもないこーでもないと悩みに悩んだ時間でした。丁寧な演出や助言を下さり心の支えとなりました。自分の演技にしっくりきたときや、相手との呼吸がぴったり合った時はこのうえない喜びを感じました。

集計結果 4

稽古		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	9	4	0	1	0
スタッフ	日時	3	1	1	0	0
キャスト	回数	7	6	0	0	0
スタッフ	回数	2	3	1	0	0
キャスト	内容	11	3	0	0	0
スタッフ	内容	2	3	0	0	0

5-1 公演を終えて

●大変だった。(過去に出演した)「赤鬼」を観て演劇に興味を持ってくれた人と一緒に、演劇を創ったと実感した時、あの頃のきつかった事やガンボが終演するまでの苦しかった事が、達成感へと変わりました。

●スタッフもキャストも一丸となって1つの舞台を作ったな、と感じています。キャストはもちろんだけど、スタッフの大道具や小道具のおかげで深みが増した舞台になったと感じているし、スタッフがいなかたらこんなに素晴らしいものはできていなかったと思うし、キャストも、すごく舞台に集中できたと思います。そして、キャストのみんなの舞台に対するモチベーションが高くて、セリフ一つ一つについて考えたり、毎回違う事に挑戦したり、みんなの稽古をみてて、すごく刺激的で、私もがんばらなきゃと思いました。

●多くの方から「ガンボ良かったよ」と声をかけていただき、本当に参加して良かったなと改めて思っています。脚本が当て書きというのもあって自分の役から、自分を客観的に見る事が増えました。その結果自己表現の幅が広がったように思います。今まで、自分の考えを人に伝えることは難しいと感じ、伝えること自体を諦めていた部分がありました。しかし、この作品の中で役の力を借りて、多くの人に言葉を伝えようと必死にもがいた先に、思いを理解して笑ってくださる人がいました。人に伝える楽しさ、伝わる喜びを知り、今までより肩の力を抜いて生きてけるようになりました。

●みんなと本気でやってきたからこそ、スッキリ終わったし、とても誇りに思える作品で、「私はやったんだよ」って言えるかけがえのない経験になりました。

●私は小さい時から舞台に立ってきましたが、スタッフの仕事を全く知りませんでした。今回、スタッフがどれだけ大変でどれだけ重要なのか、実感することができました。そして、舞台監督の土居歩さんとたくさん関わることができ、その仕事はすごく難しそうだと思ったけど、改めてとても魅力的に思うことができました。大変なことはたくさんあったけど、それ以上に舞台が大好きになれました!!(スタッフ)

5-2 この企画に参加することで当初あなたはどんなことを望み、何をしたいと思ったか?また、それらは実現さたか?

●きっかけとしては、前作の「女子にしか言えない」を観に行ったことでした。役者の演技に魅了され、自分もやりたいと思い参加して、高校生最後の演劇をやりきりたいという思いでした。

●高校演劇とは違った演劇をしたいと思いました。私は演劇部でしか演劇をしていなかったので、違う世界を見てみたいと思い応募しました。期待していた以上の経験ができたので、よかったです。

●自分が今まで破れないでいた殻を破りたい、そして自分に素直に生きたいと思い参加しました。公演が終わり初めて自分の守ってきたものを打ち明け、それに対して温かく受け入れてくれたメンバーのおかげで、勇気をもつ事ができました。

●去年初めて感じた言葉にできないような感動を、もう一回味わえると思ってこの企画に参加しました。今回の作品では前の自分を超えたいと思って挑みましたが、去年よりも成長できたものもありましたが、もっと何かできたのではないかと思います。

●演劇について何も知らなかったので、どんな芸術なのか体験したかった。演技を間近で見れたし、舞台美術なども学べてとても勉強になった。(スタッフ)

●スタッフが何をするのか全く知らなかったけど、舞台監督には興味があったので、大道具や小道具などに関わりたいなと思い、参加しました。そして、それは思ったとおりに叶い、大道具や小道具に関していろいろできた上に舞台監督がいつもどんなことをするのか少しでも知ることができました。(スタッフ)

6 今後、プラットに対する期待・要望

●高校生と創る演劇を続けてほしい。

●「ガンボ!」を観てくれた大人が、こんないい企画が自分の頃にもあったらなあ…と言っていました。本当に私はこの年代に産まれてよかったと思います。高校3年間の中で、こういう経験をさせていただいて、私のこれからの人生において宝になったと思います。だからもっといろんな高校生にこういう体験ができる場所を提供してほしいと思います。

●先日、静岡の劇場に行ってPLATと似た名前で、てっきりPLATと一緒の雰囲気だと思っていたら学生が勉強できるようなスペースやくつろげるような所が少なく驚きました。なのでPLATには、これからも学生が気軽に来れるような環境であってほしいと思いました。

7 その他、意見・メッセージ

●2年間、高校生と創る演劇に参加して、普通の高校生活では体験できないような事をさせていただきました。本当におもしろかったし、人生の糧になるような経験をさせていただきました。ありがとうございました!

●この前、東京に踊りに行ったとき「どこから来たの?」と聞かれ、「愛知の豊橋と言うところです。」と言ったら「豊橋ってステキな劇場があるところだよね。」と言ってくださり、豊橋最高にすげーって思いました。

◎アンケートは公演終了後1ヶ月後、2017年12月下旬~2018年1月上旬に実施。キャスト15名中13名、スタッフ7名中5名回収(うちキャスト・スタッフ兼務1名はキャストの欄に集計)

「高校生と創る演劇」参加経験者アンケート

〝高校生と創る演劇〟シリーズ
「穂の国の「転校生」」、「赤鬼」、「女子にしか言えない～プールの底で見た、私の幻燈～」でのキャスト・スタッフ参加経験者を対象にアンケートをしました。

1 9月の制作ワークショップレクチャーについて

集計結果 1

制作ワークショップ	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
日時	4	1	1	0	0

2 高校生スタッフの仕事について

集計結果 2

制作ワークショップ	とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
回数	2	4	0	0	0
内容	3	3	0	0	0

1 舞台関係（演劇・音楽・ダンス）に関わることをしていますか？

集計結果 1

舞台関係	はい	いいえ
キャスト	17	10
スタッフ	3	6
キャストスタッフ	0	1

「はい」に○を付けた方にお聞きします。具体的にどんなことですか？

芸術分野の大学・短大・専門学校へ進学
- 講義、ゼミで戯曲を書いたり、歴史を学んでいる。
- 芸術を支えるアーツマネジメントなどについて勉強している。舞台芸術だけでなく芸術全般。ワークショップ。授業の一環で音楽家の方とイベントを作る。
- 演技についての勉強をしている。

大学で舞台芸術関連のサークルに所属
- ダンス、ジャズダンス、演劇、よさこい（創作ダンス）

習い事
- 声楽、ピアノ、ダンス、クラシックバレエ

プロ・アマチュアとして演劇活動をしている
- ドイツへ行き、ダンスと音楽・演技を始める。
- 2017年12月31日紅白歌合戦バックアップダンサー出演
- 小劇場の舞台出演
- 舞台演出、アシスタント
- 大学の専攻は天文学だが、愛知に帰省した際は名古屋の劇団の制作、音響、照明の手伝いをしている。
- 市民と創造する演劇「とよはしの街の物語」（2018年3月3～4日／PLATホール）に出演。

2 この企画を通して、舞台・ライブに行く機会が以前よりも増えましたか？

集計結果 2

舞台・ライブに行く機会	増えた	少し増えた	どちらともいえない	少し減った	減った
キャスト	12	9	7	0	0
スタッフ	1	6	2	0	0
キャストスタッフ	1	0	0	0	0

3 将来、趣味でも仕事でもこのような舞台芸術の分野に携わりたいですか？

集計結果 3

舞台に携わりたいですか？	強く思う	やや そう思う	意識した事が無い	あまり思わない	むしろ否定的
キャスト	17	8	1	2	0
スタッフ	4	3	1	1	0
キャストスタッフ	1	0	0	0	0

4 参加することによって得られたこと、以前から変わったことはありますか？

コミュニケーション
- 人前に出ることに対して怖がることが減った。又、自分の感情への向き合いや、他者との会話のキャッチボールを意識できるようになった。
- 人の気持ちをよく考えるようになり、他人への興味が強くなりました。目上の人への礼儀も学ぶことができたので、日常や、先輩とのコミュニケーションに生かすことができています。
- 人のことをちゃんと見るということです。この経験をしなかったら人の気持ちを深く考えたりしなかった。コミュニケーションが円滑になりました。
- 内面的なことを言えば、コミュニケーションのとり方が変わったかもしれません。高校生のメンバーは、本当にいろいろなタイプの人がいて、私は自分がその中に入っていけるタイプではなかったけど、様々なタイプの人がいる場で困らなくなった気がします。いろいろな人とコミュニケーションをとるのが楽しいと思えるようになりました。
- 関わった作品の影響も大きいかもしれないけど、学校へ行くのが楽しくなったし、悩みが少なくなりました。「女子にしか言えない」に関わる前までは、学校が退屈で、意味のないものに思えていたので、高校生のうちに関わることができて、本当に良かったと思っています。
- 関係あるかはわからないけどクラスで友達ができました。

表現をすること
- 芝居に対して「正しい答え」ではなく「彼、彼女だったらどうするか」を求めるように変わりました。それまでは「大きな声でよくようをつけて身ぶり手ぶりを大きくする」のが正しいと思って部活でやってたりしたけれど「小さな声、小さな動きでも本気で相手に目的をもって声をかける」ような、リアリズムに近いことをやっても良いことが分かったり、舞台で観客に背を向けてもいいんだと知って、芝居が実はとても自由な芸術であることを知ることが出来たと思います。
- 前よりも「コトバ」について考えるようになりました。今まで自分が発していた「コトバ」、何気なくても聞いた人、投げられた人、感じとった人、は様々な影響を受けるんだな、と。「コトバ」は目に見えない財産だと思うようになりました。だから私は「言」句間違えないようにセリフを言おうという意識へ変わりました。日常生活では友達に この人ならこのように話せば伝わるかな、や、もっと丁寧に伝えよう、など人によってコトバや伝え方を変えるようになりました。つまり…友達（人）に優しくなりました！笑

自信
- 人から見た自分の良さを知ることができた。
- 前に出る事の自信、暗記する力がついた。
- 1つのことをやり遂げたという自信（たくさんの人の支えはもちろんあったが）を得られた。

自己形成
- 演劇に関することはもちろんですが、大人と会話をしたり、初対面の人と協力したり、常識的なこともたくさん経験できたことは、学校生活においても自信につながりました。
- 将来の夢が大きく変わりました。私は今、毎日が楽しく、（演劇関係の大学に進学し）この道についての勉強ができて幸せです。今後、このプロジェクトに参加する方々が、将来を考えるきっかけになるだろうと感じています。
- 1カ月半の稽古はとても楽しかったが同じぐらい辛いこともあった。だから本番を無事終えた時の思い、気持ちは今でも忘れない。自分でもよく分からないが、この企画に参加したことで負けず嫌いな性格になった。
- 「周りを見る力」、「他の人と協力して一つのものをつくることの素晴らしさ」を学べた。出演当時、引っこみ思案だった私ですが、この企画に参加したのを皮切りに、自分の意思を伝えることが多くなった気がします。

- この経験を通して、自分から挑戦することの大切さを学びました。何事にも全力で、チャンスは自分からつかみとる気持ちでこれからも精進していこうと思います。
- 演出家の方にがつんと怒られたのが、本当に良い経験でした。家族以外の人にあそこまで怒られたのは初めてで、「しっかり考えなければ」と、作品や企画に参加する姿勢を改めて考え直すきっかけになりました。今でも大学で、チームで制作する時の戒めになっています。たった数ヵ月の付き合いでも、相手が高校生でも、本気で向き合ってくれたことが、とても嬉しかったです。

人との出会い
- 色々な人達との出会いです。同じ高校生のみんなとの出会いに関しては、今になってすごく奇妙だなと思います。というのも、例えば僕は普通科の高校に通っていると、普通科ではない商業や工業の人とは全く接点がないんです。住んでいる地域が違うと、小学校中学校はそもそも違うし、高校で普通科とそれ以外の科で分かれてしまえば大学で会うことはまずないし、そうすると就職先で会うことも多分ない。全員ではないけど、そんな風に接点がほとんどない人達が一箇所に集まっているのがすごく奇妙だし、そう考えると価値観だってバラバラでなんのまとまりもないあの集団が、よく上手く混ざり合ったなと思います。
- 僕の姉は「転校生」、僕は「女子にしか言えない」に参加し、年下に受け継がれていって、これからずーっとこの企画を続けてほしいなと思います。なんとなく、この企画に参加したら人間的に成長できるので将来活躍できると思うんです（笑）僕自身も友情・成長たくさん得ることができ、自信もつきました。だから、これからたくさんの人達にこの企画に参加してもらいたいです！
- 素敵な仲間です。スタッフ・キャスト含め、今でも連絡をとっている人もいて、悩んだ時に相談にのってくれたり、助けてくれる人と出会えたことは1番幸せだなと思います。
- 他の学校、他の学年の人と関われたこと。同じ高校生が演劇を通して1つのチームとなり、40日間を共に過ごし、仲間ができたこと。みんなで乗り越えることによって、本番を終えた後の達成感、みんなで助け合うこと、メンタルの強さを得られた。

スタッフ
- 作品とは以前は俳優が大部分をしめていると思っていましたが、実際はそうではありませんでした。脚本を作る人、舞台美術、照明、音響、制作、舞台監督などなど様々な人が関わって舞台ができているということ。作品を見ていたときは、役者に目がいきがちでしたが、考えが大きく変わりました。
- 初めてスタッフを経験して、裏方さんのことがよく分かったり、舞台のことをより深く考えられるようになりました。そして、あまり観たことのなかった小劇場の作品を多く観るようになりました。
- 劇関係は仕事として関わり続けようとは思わないなって思いました。たくさん劇は観たいですなぁ。

◎アンケートは2017年12月下旬～2018年1月上旬に実施。キャスト経験者36名中28名、スタッフ経験者20名中9名、キャスト・スタッフ経験者2名中1名回収。